

問題2 電磁気学 解答例

I

(1) ガウスの法則より導体球の中心から距離 r の位置における電界の大きさは

$$E(r) = Q/4\pi\epsilon_0 r^2$$

導体球表面での電界強度は $E = Q/4\pi\epsilon_0 a^2$ であるため、導体球表面の単位面積あたりに働く力は

$$f = \frac{1}{2}\epsilon_0 E^2 = Q^2/32\pi^2 \epsilon_0 a^4$$

(2) 導体球の電位は

$$V = \int_{\infty}^{a+d} -Q/4\pi\epsilon_0 r^2 dr + \int_{a+d}^a -Q/4\pi\epsilon r^2 dr$$

$$= \frac{Q}{4\pi} \left\{ \frac{1}{\epsilon_0(a+d)} + \frac{1}{\epsilon} \left(\frac{1}{a} - \frac{1}{a+d} \right) \right\}$$

導体球の持つエネルギーは

$$U = \frac{1}{2} QV = \frac{Q^2}{8\pi\epsilon_0(a+d)} \left(1 + \frac{\epsilon_0 d}{\epsilon a} \right)$$

(3) 導体球と導体球殻間の電位差は

$$V_{ab} = \int_{\infty}^{a+d} -Q/4\pi\epsilon_0 r^2 dr + \int_{a+d}^a -Q/4\pi\epsilon r^2 dr - \int_{\infty}^b -Q/4\pi\epsilon_0 r^2 dr$$

$$= \frac{Q}{4\pi} \left\{ \frac{1}{\epsilon_0} \left(\frac{1}{a+d} - \frac{1}{b} \right) + \frac{1}{\epsilon} \left(\frac{1}{a} - \frac{1}{a+d} \right) \right\}$$

よって、静電容量は

$$C = \frac{Q}{V_{ab}} = \frac{4\pi\epsilon_0 b(a+d)}{b-a-d(1-\epsilon_0 b/\epsilon a)}$$

(4) 誘電率を r の関数 $\epsilon(r)$ とすると、導体球と導体球殻間の電界は、

$$E(r) = Q/4\pi\epsilon(r)r^2$$

これが一定となるため、 $\epsilon(r)r^2 = \text{定数}$

つまり、誘電率 $\epsilon(r)$ は r^2 に反比例する分布であればよい

問題2 電磁気学 II (解答例)

(1)

問題の図2内左図において、磁性体内部の半径 r の位置にある点 A を通る閉曲線 C (半径 r の円) 上の磁界の強さベクトル H の周回積分値は、閉曲線 C と鎖交する真電流 (コイル電流) との総和と等しく、次式で記せる。

$$\oint_C H \cdot ds = NI \quad (1)$$

環状磁性体の形状は、原点 O に対する同心円形状であるから、閉曲線 C の接線方向の磁界の強さベクトル H の大きさは一様であり、 $|H|=H$ とすると、(1) 式右辺は、

$$\oint_C H \cdot ds = 2\pi r H \quad (2)$$

となる。(1), (2) 式より、磁界の強さの大きさ H は、

$$H = \frac{NI}{2\pi r} \quad (3)$$

一方、磁性体内部の磁束密度ベクトル B と磁界の強さベクトル H の間には、次式が成り立つ。

$$B = \mu_s \mu_0 H \quad (4)$$

(4) 式から、磁束密度ベクトル B は磁界の強さベクトルと同一方向のベクトルであるため、 $|B|=B$ とすると、両者の大きさは、次式の関係を持つ。

$$B = \mu_s \mu_0 H \quad (5)$$

(5) 式に (3) 式を代入して、本問の解答を次式で得る。

$$\therefore B = \frac{\mu_s \mu_0 NI}{2\pi r} \quad (6)$$

(2)

磁性体内部の磁束密度ベクトル B と磁界の強さベクトル H と磁化の強さベクトル M の大きさ B , H , $|M|=M$ の間には次式の関係が成り立つ。

$$B = \mu_0 (H + M) \quad (7)$$

(7) 式に (3), (6) 式を代入して、本問の解答を以下で得る。

$$\therefore M = \frac{(\mu_s - 1)NI}{2\pi r} [A/m] \quad (8)$$

(3)

以下の図 A に示すように、環状磁性体の断面における微小断面積 $dS = a dr$ を通過する磁束 $d\Phi$ は、

$$\therefore d\Phi = B \cdot dS = \frac{\mu_s \mu_0 NI}{2\pi r} dr \quad (9)$$

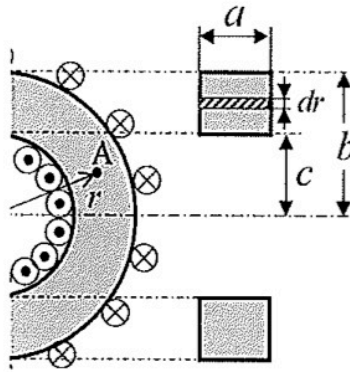


図 A

ここで、断面形状から r の範囲は $c \leq r \leq b$ であるので、この範囲で (9) 式を定積分して、環状磁性体の断面を通過する総磁束を次式で得る。

$$\Phi = \int d\Phi = \int_c^b \frac{a\mu_s\mu_0 NI}{2\pi r} dr = \frac{a\mu_s\mu_0 NI}{2\pi} \log \frac{b}{c} \quad (10)$$

上記で求めた総磁束 Φ が環状磁性体に N 回巻かれたコイル電流と鎖交するので、本問の解答は次式で記せる。

$$\therefore \text{全磁束鎖交数 } N\Phi = \frac{a\mu_s\mu_0 N^2 I}{2\pi} \log \frac{b}{c} \quad (11)$$

(4)

コイルのインダクタンス L は、全磁束鎖交数 $N\Phi$ とコイル電流 I を用いて、次式で記せる。

$$L = \frac{N\Phi}{I} \quad (12)$$

(12) 式に、(11) 式を代入して、本問の解答を次式で得る。

$$\therefore L = \frac{a\mu_s\mu_0 N^2}{2\pi} \log \frac{b}{c} \quad (13)$$

(5)

コイルのインダクタンスは、コイルの巻数 N とコイルから見た磁気回路の磁気抵抗 \mathfrak{R} を用いて、次式で記せる。

$$L = \frac{N^2}{\mathfrak{R}} \quad (14)$$

(14) 式に、(13) 式を代入して整理して、磁気抵抗 \mathfrak{R} は次式で記せる。

$$\therefore \mathfrak{R} = \frac{2\pi}{a\mu_s\mu_0 \log(b/c)} \quad (15)$$